

# 「雀の仇討ち」の呪力

―北東アジアの類話からの考察―

齋藤 君子

日本の昔話「雀の仇討ち」(TF525)は単独で語られるほか、「柿争い」と結合して「柿争い―仇討ち型」(TF522A)となり「猿蟹合戦」の名で広く親しまれてきた。冒頭に「寄り合い田」が付いた「寄り合い田―仇討ち型」(TF528A)もある。アアルネは一九一三年に「旅歩き動物たち」という論文を書き、この昔話をアジア型「雄鶏と雌鶏とあひるとピンと針が旅に出る」(AT210)とヨーロッパ型「動物たちの野営」(AT130)に分け、日本の「猿蟹合戦」はアジア型が基になって成立したとしている。実際、日本の「雀の仇討ち」の類話は中国、韓国、モンゴル、インド、東南アジアなど、アジア各地に分布している。その後も多く研究者たちがアジア諸国から日本へ伝播した可能性について論じてきた。<sup>1)</sup>

近年の研究で注目したいのは、一九八七年に書かれた児島瓊禮の論文である。<sup>2)</sup> 児島はアメリカ北西岸インディアアンやビルマなどの類話を取り上げ、この昔話の主題が不安定な天候からの回復を図ることにあるとした。斧原孝守も児島説を支持し、ベ

トナムにも同じ趣向の話があると指摘している。<sup>3)</sup>

筆者は一九九一年にシベリアのナーナイ、エヴェン、エネツの類話を紹介し、日本の「雀の仇討ち」にもっとも近いのはナーナイの昔話であるとした。<sup>4)</sup> その後、シベリア諸民族の類話の中に風や吹雪などの悪天候をもたらす魔物を退治する話が複数存在することに気づいた。小論の目的は、悪天候の回復と関係する類話を要約して紹介し、それぞれの特色を明らかにするとともに、伝承の担い手はどのような人たちだったのか、どのような場で、どのような目的のために語られてきたのかを考察することにある。

類話1 アイヌ(北海道)<sup>5)</sup>

蜘蛛の女神のところに沖から神がやってきて、「雲の関のあなたに村を領している大魔神があなたをかどわかしくる」と告げる。蜘蛛の女神は家のあちこちに針男、栗男、大黃蜂男、蛇男、杵男、木臼男をしのばせ、自分は一本の

茅の幹に変身して敵の来襲に備える。そこへ現れた大魔神を助った人たちが次々に攻撃し、やつつける。すると静寂が戻り、妖雲が晴れ渡る。

これは主人公の蜘蛛の女神が自分自身の身に起きた出来事を語る形式をとるカムイ・ユーカラである。原題は「蜘蛛の神の自叙」だが、『日本昔話通観1 北海道』では「海魔の来襲」(二五)となつている。大魔神を退治すると静寂が戻り妖雲が晴れ渡つたという結末からすると、この大魔神は悪天候をもたらす海の魔物と考えられる。この話では「雀の仇討ち」と同様、針や栗、杵や臼といった助った人たちは擬人化されているが、主人公とその仲間たちが敵の棲みかへ出掛けていくのではなく、自分の家で敵を迎え撃つ形をとっている。

アイヌにはこの他に四つの類話があり、登場する敵はそれぞれ(六つの首の化け物)、(六人の海の化け物)、(海魔の六兄弟)、(六つの喉首のある化け物)となつていて、そのうちの半数は海の化け物、すなわち海を荒らす魔物である。

アイヌにはこの説話以外にも人間の村々に壊滅的な被害を与える神をこらしめる話がある。「風神静め―巫術の扇型」(JONA)の主人公は風の女神である。この女神はいつも座って針仕事ばかりしているが、ある日寂しさのあまり、「美しい服を着て外に出て、ふた舞い、み舞い舞い続けると、手の先から風が立つて地上を吹き荒らし、海面に立つて海の底が盛り上がり、海面

がもぐりこみ……」といった大災害が発生し、人間界の村はすっかり荒廃する。そこで、この村に住むオキクルミが女神のところへ出掛けていって復讐し、こらしめる。女神は自分の非を認め、これからは人間界を振り向くときは静かに振り向くことにすると約束し、和解が成立して平安が戻る。「飢饉救い―漁の妨げ魔」(三〇)は悪神ニツネカムイが川にクルミの矢を放ち、川の水を苦くして鮭が泳げないようにしてしまう。それを見たオキクリムイが悪神を地獄へ落とす。そして銀の弓に銀の矢をつがえて放つと、清らかな水が流れ、鮭が喜んで川をさかのぼる。これら二つの説話は文化英雄の活躍が大きな自然災害を終息させた語り伝えるものである。

## 類話2 ニヴフ(サハリン)<sup>(6)</sup>

錐と草束がいつしよに暮らしている。あるとき、草束が薪割りに出て風に飛ばされる。錐が探しに出掛け、途中で小便、大便、犬の白い頭蓋骨、砥石の順に出会い、わけを話して彼らを仲間に加え、旅を続ける。土小屋を見つけて中に入り、錐は床の真ん中に、大便と小便はその両脇に、犬の頭は敷居の下に、砥石は扉の上に陣取る。そこへ悪霊のようなやつがやってきてドンドン足を踏み鳴らして歩き、いきなり錐を踏みつける。驚いた敵は小便を踏んで足をすべらせた拍子に、片手で大便を掴む。扉へ向かって逃げる時、犬の頭がその足に噛みつく。倒れて扉につかまると、

上から砥石が落ちてきて死ぬ。錐とその仲間たちは草束を見つけたし、家へ帰る。

この話では主人公は錐、敵は「悪霊のようなやつ」である。別の類話<sup>(7)</sup>では敵は魔物のキンスで、語り出しは「草と錐がいつしよに暮らしていた。あるとき天気が悪くなり、強風が吹きだし、雪が降りはじめ、秋になって雨まじりの雪が降った」とある。物語は悪天候からはじまるのがわかる。この点に注目してこの昔話を見直すと、主人公の旅の目的は仲間の救出だけではない、悪天候の回復だったことに気づかされる。

ニヅフのもうひとつの類話<sup>(8)</sup>の主人公はキンスによって妹を水中に引き込まれた男である。彼はナイフ、錐、砥石を持って妹を探しに行く。途中でカマスの頭、犬の頭、それに片足が犬の脚をした鉄人と出会い、これらを従えてキンスの棲みかへ行き、帰ってきた敵を退治して、さらわれていた妹を奪還する。

一見この話は悪天候とは無関係に見える。ところが、ベレズニツキーによれば、キンスとは人間の体内に棲みついて発狂させたり、人間をとって食ったりする悪霊で、海で漁をしている舟を転覆させるのもこのキンスの仕業だと考えられているという<sup>(9)</sup>。海でアザラシやトドを追うニヅフ人猟師にとって、強風や吹雪の元凶であるキンスは恐ろしい敵である。猟師は海が荒れるとキンスの好物とされるベリーや小麦粉や米などを水中に投じ、この悪霊をなだめる儀礼をおこなう一方、強風で何日も

漁に出られないときには風封じの呪術をおこなう。シレンクは一九世紀中ごろ、トイク岬で次のような光景を目撃している。それによると、長い棒の先にアザラシの皮を結びつけたものを雪中に立ててキンスに献じ、二本歯の鏝にタバコの葉と火口を突き刺した矢を風に向けて放ったという<sup>(10)</sup>。タクサミは一九五三年にニヅフの男たちが風に腹を立てて銃を撃ったと記している。矢や銃弾が当たった場所に血が垂れていたのを目撃した人たちもいたようだ<sup>(11)</sup>。これらの記述を読むと、錐が魔物退治の立役者として活躍する昔話の背景にこの風封じの呪術があったのではないかと考えられる。サハリンではオホーツク海から吹きつける北東の風はつねに吹雪を伴い、海で海獣猟をする男たちを悩ませてきた。北風の精霊を鎮めるもつとも有効な手段は子犬を犠牲に捧げることだとされている。若い犬を何頭か絞殺し、その肉と内臓を鍋で煮て食べる。それでも嵐が静まらないときは、翌日も同じ儀礼が繰り返される<sup>(12)</sup>。

### 類話3 ナーナイ 1 (アムール河流域)<sup>(13)</sup>

チオルチョミヤカ(シジュウカラ)が父親を殺した魔物を退治しに出掛けることにし、何年もかかって木を伐り倒し、丸木舟を造って川をさかのぼる。途中、カワカマス、ドングリ、焼き串、木槌、木の台に順次出会い、これらを仲間に加える。魔物の家に着いた一行は魔物の留守中に各自適当な場所に隠れ、帰ってきた魔物を次々に襲撃し、やつ

つける。最後に魔物は木槌に叩かれてこなこなに砕かれる。仇討ちを成し遂げた一行は再び舟に乗り、川を下って帰る。チヨルチヨミヤーカーカは仲間たちをひとりひとり元の場所に降ろし、自分も棲みかに帰る。そして高らかに「チヨルチヨミヤーカーカ！」と叫ぶ。

これは一九四一年に記録された昔話である。結末で主人公が高々と「チヨルチヨミヤーカーカ！」と鳴くのは勝利宣言である。「チヨルチヨミヤーカーカ」はシジュウカラの鳴き声を人間の言葉に移し替えた「聞きなし」で、その意味は「よし、いいぞ、魔物はやつつけた！」である。

この昔話の構造を見ると、主人公が家を出て帰ってくるまでの旅の全行程が魔物退治を中心にきれいにシンメトリーになっている。要するに、この昔話は累積昔話の構造をもっているのだ。このような単純な構造をもつ昔話は一般的に言って、起源が古い。鳥の声の聞きなしが重要な役割を果たしていることも、この昔話の古さを物語っている。シベリアの狩猟採集民は厳しい自然の中で生きていくために、風の音や野鳥の声に耳をすまし、自然が発するさまざまな情報を聴き分ける聞き耳を持っていた。この昔話には北方狩猟民のそうした鋭い感性が投影されている。

#### 類話 4 ナーナイ 2 (アムール河流域)<sup>(4)</sup>

チヨルチヨミヤーカーカがあるとき舟を造り、帆を立てて川を

下っていく途中、カワカマスの顎骨、大槌、下痢便、ドングリ、焼き串の順に出会う。「どこへ行く」と訊かれるたびにチヨルチヨミヤーカーカは「七人の美しい娘たちの兄を殺しに行くところさ」と答える。すると「おれにもお伴をさせてくれ。あいつにはおれも恨みがある」と言い、仲間に加わる。さらに進むと、一軒の家の前で七人の美しい娘たちが魚の皮をなめしている。娘たちが「どこへ行くの」と尋ねるので、「おまえたちの兄を殺しに行くところさ」と答える。すると娘たちは「あなたたちにメルゲン(勇士)は殺せない」と言って嘲笑う。日暮れに一行はメルゲンの棲みかにやってくる。チヨルチヨミヤーカーカは助っ人たちをそれぞれの持ち場に配置し、自分は煙出し穴の上にいる。帰ってきたメルゲンを殺し、メルゲンの首を切り落として舟の帆先に付け、川をさかのぼる。七人の娘たちがこれを見て、チヨルチヨミヤーカーカの話信じる。五人の仲間たちが娘たちをひとりずつ妻にし、シジュウカラはいちばん上といちばん下の娘二人を妻にし、家へ連れ帰る。

この話に敵として登場するメルゲンとはナーナイの英雄叙事詩に登場する力の強い若者のことで、正の主人公も負の主人公もメルゲンである。この場合はもちろん後者である。この類話のひとつの特徴はメルゲンの妹だという七人の美しい娘たちが出てきて、結末で主人公とその仲間たちの妻になることである。

これはナーナイの他の類話には見られない要素で、動物昔話から魔法昔話へ一歩近づいている。

ここで、この昔話に登場するシジューカラがナーナイなどツングース・満州語族の民間信仰の中でどのような位置を占めているかを見よう。エヴェンキは赤ちゃんが誕生すると、その子の健やかな成長を願って特別な木箱を作り、その中にセーム皮で鳥の巣を作り、そこに木彫りのシジューカラを入れてたいせつに保管する。筆者はナーナイの集落でこの習俗を連想させる、次のような話を聞いたことがある。インフオーマントの女性がまだ幼かったとき、祖母が彼女とお兄さんをシヤマンのところへ連れていった。彼女が元気で幸せに暮らせるように、彼女のパニヨをシヤマンに預け、保管してもらうためだった。パニヨとは三つある人間の靈魂のうちのひとつで、「生命の靈魂」である。シヤマンは巫術をし、しゃべったり叫んだりしてわたしたちのパニヨを取った。しかし、このシヤマンはあまり力の強いシヤマンではなかったので、取ったパニヨをより強力なシヤマンに預けて保管してもらったそうだ。

ツングース・満州語族はワタリガラス、鷲、白鳥、シジューカラ、アビ、シギなどの鳥をシヤマンの助手とみなし、家族の健康を守るためにたいせつにする。もちろん、これらの鳥を殺して食べることはタブーである。とくにシジューカラは子供の魂を病魔や悪霊から保護することのできる唯一の鳥とされてきた。<sup>(16)</sup> 新生児の魂が保管されている木彫りのシジューカラは、幼

い命を悪霊から守る器である。言い換えれば、生命の依代である。このことを念頭に置いて再度昔話に立ち返るなら、主人公のシジューカラは擬人化された動物というより、人間そのものといえよう。

### 類話5 ナーナイ 3 (アムール河流域)<sup>(17)</sup>

マラが犬の舌、薄胸、長首、下痢便という奇妙な仲間たちといっしょに暮らしていた。あるとき吹雪が吹き荒れ、七日間猟に出られず、みんな腹をすかせ、寒さにふるえていた。マラは残っていた麦で粥を煮ることにし、下痢便に氷穴へ水を汲みに行かせるが、下痢便は氷穴にくっついてしまう。犬の舌が下痢便を探しに行くが、これも凍りつき、長首は泣きすぎて首がちぎれてしまう。マラが薄胸に占いをさせると、金敷きが薄胸に当たって薄胸も死んでしまう。マラがこれはブチュケンの仕業だと思ったとたん、吹雪が収まり風も鎮まる。

そこでマラはブチュケン退治の旅に出掛ける。途中、ドングリ、皮なめし、木槌、カワカマス、リス、石の大槌、二又に会って仲間に加え、さらに行くところの美しい娘に出会う。娘たちが「どこへ行くの」と尋ねるので、「ブチュケンと戦いに」と答える。すると娘たちは「おまえたちにわたしたちの夫ブチュケンをやっつけることができましたら、左側を照らしていた太陽が右側を照らすでしょう」と嘲笑

する。夕方、仲間たちは家のよう家でなく、丘のようで丘でなく、石の大きな扉があるところへやってくる。マラはその中に入り、仲間たちを配置につける。

どこから竜巻が起き、その竜巻の中から一本足で一つ目のブチュケンが現れる。ブチュケンは二人の死人を抱えている。ブチュケンが家の中に入ってきて炬の灰を吹くと、ドングリがはせて目に当たる。そこを皮なめしと木槌が殴りかかり、リスが鼻の穴に潜り込み、石の大槌が頭を叩き割り、二又が鋏で頭を切り落とす。

こうしてマラとその仲間たちは岐路につき、再びブチュケンの三人の妻たちに会う。三人はブチュケンが殺されたと聞き、首をくくって死ぬ。

マラは仲間たちにこれからどこへ行くつもりかと尋ねる。カワカマスは、「子供たちがわたしを見つけて捕まえるように！」と言って川に入り、ドングリは、「子供たちが喜んで空を跳めるように！」と言って星になり、皮なめしと木槌は、「子供たちがわたしを使いように！」と言って樺の木になり、リスは、「子供たちがわたしを捕まえるように！」と言ってタイガに逃げこみ、二又は、「子供たちがわたしでハン（仕掛弓を背負うための道具）を作るように！」と言ってサルヤナギになり、石の大槌は、「おれは子供たちを災いから守る！」と言う。マラは家に帰り、「これで仇討ちを果たしたぞ！」と叫ぶ。

この話に登場するブチュケンとは、風を統率し竜巻を起こす精霊＝ブチュを子供用の玩具にしたものである。玩具とはいってもブチュの持つ強力な性質は継承している。この昔話のブチュケンは強風を吹かせ、竜巻を起こす力を持ち、ブチュそのものと見ていい。仇討ちに加わった仲間たちは結末で未来の子供たちのために役立つものになることを約束し、物語は終わる。この昔話を記録したチャダーエヴァの解説によると、この話の結末は「すべては未来の子供たちが狩猟あるいは漁撈においていつも成功を収めるため」のものだという<sup>18)</sup>。これは強風を吹かせる精霊を退治して平穏な生活を取り戻すと同時に、未来を担う子供たちに豊かな生活を約束するものだというのである。結末の勝鬨の声は悪天候を制圧したこと、新しい時代が到来したことを宣言するものである。



ブチュとブチュケン（チャダーエヴァ著『シベリア民族玩具の謎』より）

「ナーナイは悪霊を追い払う必要があるときは悪霊にまつわるニングマン（昔話と英雄叙事詩）を語り、北風を鎮めたいときは北風にまつわるニングマンを語る。このニングマンを語る人はもの静かな、温厚な人でなければならない。怒りっぽい、神経質な人が語ってはいけない。北風がますます怒りだすからだ」とアヴローリンが述べているように、悪天候を回復させるために語られる話なのである。

## 類話5 チュクチャ 1 (チュコトカ半島)<sup>(20)</sup>

イイヌヴィエ（炎の人）という名の男がいる。ある晩、吹雪になり、トナカイの群のそばで寝ていたイイヌヴィエは突然目が覚める。イイヌヴィエは怖くなり、自分のスキー、ストック、ナイフ、砥石に、「おれはおまえたちの主人だから、おれが眠っている間、おまえたちはおれを守ってくれ」と頼み、再び眠る。すると吹雪が吹き荒れ、魔物のケレが三匹現れる。スキーと砥石は「主人を守ろう」と言うが、ナイフは主人を裏切つてケレに味方し、ケレに「おれを握つてイイヌヴィエの脇腹を突き刺せ」と言う。すると砥石がナイフに襲いかかり、倒す。スキーとストックと砥石がケレを襲撃し、ケレの片目をつぶす。ケレは仲間のところへ逃げる。もう一匹のケレも同じ目に遭う。三匹目のケレは地下を通つてイイヌヴィエのところへ行く。するとストックがイイヌヴィエを起こし、ケレがそつちへ行くから自分

でなんとするように言う。イイヌヴィエは腰に下げていた白鳥の骨のパイプを雪に突き刺し、「敵はもうおれの下にきているか」と尋ねる。パイプが「もうすぐ来る」と教える。イイヌヴィエがパイプから息を吹き込むと、年寄りケレは飛んでいってしまふ。イイヌヴィエはナイフを折り捨て、他の道具は家に持ち帰る。

ケレという魔物にはさまざまな種類があり、神経性の病気や疫病をもたらすものもあるが、この昔話に登場するケレは悪天候の権化である。ケレは地下から姿を現すこともあるが、上界から下りてくることもある。地上におけるケレの棲みかは人間の集落から遠く離れた荒野だという。そういう場所をひとりで行きかかると、岩の割れ目に潜んでいるケレが襲い掛かると怖れられている。夜中にどうしてもひとりであるところへ行かなければならないときは、呪文を唱えながら歩く。

ここではスキー、ストック、砥石、ナイフ、パイプといった道具類が自らの意思で主人に加勢するか、それともケレに加勢するかを決める。シベリアの狩猟民たちは動物はもちろんのこと、道具などの物にも魂があると考えてきた。彼らと良い関係を築いていれば、彼らが自分から率先して主人のために働いてくれる。だから動物や道具をたいせつにする猟師はいつも猟運に恵まれる。二〇世紀初頭にチュクチャの民俗調査をおこなったボゴラスによれば、狼、トナカイ、セイウチなどの動物や、鍋、

槌、針といった道具類ばかりか、人間の排泄物でさえ、シャマ  
ンの援助霊となつて働き、シャマンを助けるという。<sup>(21)</sup> こうした  
観念は魔物退治の昔話の中でも生きています。

ペーリング海沿岸、サハリン、アムール河流域など北東アジ  
アでは、悪天候が続いて海に出られないとき、男たちは一軒の  
家に集まつて昔話を語り合う習俗があつた。そういう場で好ん  
で語られたのが魔物を退治する昔話だつた。悪天候を鎮めるに  
はその元凶である魔物をやつつける昔話を語ることが有効だと  
考えられていたのである。

## 類話6 チュクチャ <sup>(22)</sup> 2。

息子たちに先立たれた男がいた。この男が年を取つてから、  
もうひとり男の子が誕生する。この子は大きくなると、ポー  
トを造つて旅に出る。そして途中で出会つたケレをつぎつ  
ぎにだまして殺す。こうしてこの子は大勢のケレを退治し  
て家に帰り、両親に「人殺しどもをやつつけた！」と告げる。

この昔話でたいへん興味深いのは、語り手が最後に、「おし  
まい。わたしは風を殺した！」と宣言していることである。こ  
れが昔話を語り収める慣用句なのだ。要するに、これは悪い風  
を鎮めるために語られた昔話なのである。

主人公の男の子の誕生前に死んだ兄たちの死因については  
ここではなにも語られていないが、強風のために死んだものと

思つて間違いないだろう。先に挙げた類話5では主人公と助つ  
人たちによる旅が欠落しているが、ここにはそれがある。主人  
公が家に帰りついて誇らしげに勝利宣言をするのはナーナイの  
話と同じである。

## 類話7 マヤ（中央アメリカ）<sup>(23)</sup>

創造主が最初の間を創造して失敗する。洪水が起きて天  
から樹脂が降り、シエコトコヴァツチという神（鷲、ない  
しは鷹）が来て彼らの目をえぐり、カマロツツ（大きなコ  
ウモリ）が来て頭を斬り、コツツバラムが来て肉を食い、  
トゥクムバラ（獺）が骨や神経を打ち砕く。棒、石、土甕、  
焙炉、皿、犬、鍋、挽臼どももみんないっせいにしゃべり  
だし、彼らの顔を殴りつける。すると積み重ねてあつた炉  
辺の石が火のそばから飛び出してきて彼らの頭を殴る。人  
間たちはあちこち逃げ回るが、家の上にあがろうとすれば  
家が倒れ、木の上に登ろうとすれば木が彼らを遠くへ放り  
投げ、岩穴へ逃げ込もうとすれば岩穴が彼らの前で閉じて  
しまう。こうしてさまざま物質と動物が出来損ないの人  
間に対して仕返しをする。これが創造主によつて初めて造  
られた人間の末路だつた。

これは一六世紀に書かれたマヤの神話『ポボル・ヴフ』に記  
述されている説話で、退治されるのは創造主が最初に創造した、



出来損ないの人間たちである。この人間たちには魂も知恵もないが、動物や道具にはそれがあり、各自自分の能力を発揮して人間を退治する。洪水に端を発し、攻撃の連鎖が生じて世界はカオス状態に陥るが、最後には秩序が回復して終わる。この話は創造神話に組み込まれているために他の類話とは少し趣を異にしているうえ、主人公と助っ人たちが旅に出ることもないが、ATU210のひとつであることは間違いない。

類話8 北アメリカ北西岸インディアン（ツィムシヤン、

ハイダ、ネウエツター、クワキウトル、ヌートカ<sup>(24)</sup>

南風がひっきりなしに吹き、ワタリガラスとすべての生き物が飢える。ワタリガラスが会議を開き、南風と戦うことになる。旅に出るために特別なカヌーが造られる。一行は南風の家に着するが、風が強く上陸するのに苦勞する。ワタリガラスの命令で南風をやっつける。南風が命乞いをするので、良い天候と悪い天候を交互にすることで妥協し、命を助ける。

この話の主人公はワタリガラスで、助っ人はオヒヨウやヒラメなどの魚である。児島瓔禮はこの昔話を「天候の不均衡から均衡への移行」を語る話とみなしている。アジア大陸北東のカムチャトカ半島からチュコトカ半島、さらにアメリカ大陸北西岸一帯にはワタリガラスを主人公とする神話的な昔話が広がっ

ていて、この地域一帯の口承文芸ではワタリガラスは鳥でありながら、人間とまったく同じような生活を送り、創造神、文化英雄、あるいはトリックスターとして活躍する。右の話ではワタリガラスがあらゆる生き物を統率して旅に出、南風をやっつけて天候の回復を実現している。

類話9 ミヤンマー<sup>(25)</sup>

妊娠している女が種粉を乾かそうとすると太陽がかげり、やめようとする。女が太陽をののしると太陽が女に呪いをかけたので、女は親指ほどの大きさの息子を出産する。生まれた息子は太陽と戦うために母親に大きな菓子を作ってもらい、旅に出る。

真夏でだれもが暑さに苦しんでいる。干上がった川岸にあった小舟に菓子をはかりとかけ与えて仲間に加える。さらに竹いばら、苔、腐った卵に出会い、菓子を分け与えては仲間に加えていく。一軒の家に着き、各自持ち場に隠れ、帰ってきた人食いを退治する。夜明けに親指小僧と三人の仲間には雨の支援で太陽に挑む。大雨で洪水になって溺れそうになるが、小舟に乗って無事に帰還する。

この話で注目したいのは、主人公の親指小僧が菓子を分け与えては仲間を獲得していく、「桃太郎」の黍団子とまったく同じ趣向がここにも見られることである。斧原孝守はチベットに

これと同じ趣向を持つ昔話があるとし、紹介している。<sup>26</sup>チベット  
の主人公はひとりの母親で、旅に出る動機はふいに姿を消し  
た息子の探索である。斧原は、「この話の最大の興味は、母親  
が助っ人に食べ物を与えてお伴にするという黍団子の趣向を説  
き、しかも助っ人が『桃太郎』同様、三種類の鳥獣になつてい  
る点である」とし、さらに中国大陸に展開するATU210の「うち、  
黍団子の趣向を説く類話は「四川・甘粛の蔵族から、青海省の  
トゥーとサラル族、漢族、さらに内蒙古のモンゴル族へと中  
国大陸の西南部から西北部へ取り巻き、河北省の漢族を経て朝  
鮮半島に続いている。そしてその帯は、そのまま日本列島へつ  
ながっていくのである」と述べている。

## 類話10 ベトナム<sup>27</sup>

早魃になったので蛙が蟹、熊、虎、蜂、狐をお伴に連れて  
天帝のところへ訴えに行く。

## まとめ

「雀の仇討ち」は日本では「猿蟹合戦」の後半として広く親し  
まれてきた。この話型がアジア大陸からアメリカ大陸まで広範  
囲に分布していることは、この昔話の起源がきわめて古いこと  
を物語っている。

主人公が桃から生まれたというのは日本特有だが、家を出て

鳥獣や道具類を助っ人に鬼退治を果たして帰還するという基本  
的な筋は他の民族の話と同じである。キジ、トンビ、カラスな  
ど鳥が目的達成上重要な役割を果たすところはナーナイや北ア  
メリカ先住民の類話を想起させる。主人公が異常誕生児という  
意味ではミャンマーの話に通じる。秋田県角館市には竹から生  
まれた「竹なり子」と葭（よし）から生まれた「葭なり子」を助っ  
人にする話があり、帰途、前者は産土神、後者は不動様になる。  
これなどはナーナイの「勇士マラ」に登場する助っ人たちを想  
起させ、たいへん興味深い。「桃太郎」の類話の中には敵に捕  
らわれていた娘を助けて結婚する話があり、これもナーナイの  
類話を想起させる。

サハリン、アムール河流域、チュコトカ半島では、ATU210  
が荒ぶる神々を退治し、悪天候を鎮める昔話として語られてき  
た。ナーナイでは結末で鳥が勝鬨の声を上げ、穏やかな陽気が  
戻ったこと、新しい時代が到来したことを高々と宣言する。ア  
イヌにも悪天候の回復との結びつきをうかがわせる話がある。  
これら北方民族は主に漁撈と狩猟を生業にしてきた民族であ  
る。彼らにとって海や山を吹き荒れる強風は生存を脅かす最大  
の敵である。嵐で猟に出られないときは、天候の回復を願って  
籠り昔話を語る習俗があった。そんな場で語られた昔話のひと  
つがこの説話だった。しかし、この話型のすべてが悪天候の回  
復のために語られたわけではない。主人公が旅に出る目的は魔  
物にさらわれた肉親の探索や仇討ちであったり、単なる魔物退

治だったりすることも多い。しかしそういう場合でも、敵の正体が悪天候をもたらす魔物であった可能性は残る。肉親をさらわれたり、命を奪われたりした原因が暴風雨などの自然災害だった可能性はじゅうぶんありうる。

日本の「雀の仇討ち」が悪天候の回復のために語られたことを立証する直接的証拠はない。日本の類話の多くは雀が旅に出る動機を、鬼（鬼婆、山姥）に卵を食われたことに対する仇討ちとしている。ここで問題なのは「鬼に食われた」という日本語の解釈である。この表現には文字通りの意味以外に、疫病で命を落としたり、強風や水害で命を落としたりする場合も含まれるのではないか。

日本の鬼についてはさまざまな伝承が混在し、固定したイメージはない。近藤喜博は大正初めの民俗学者石橋臥波の鬼に関する研究を、「鬼の成立してくる根本的要因を、風雨・雷電・地震・火山活動の如き、自然現象の猛威の場にこれを認めようとするものであつて、巨大なエネルギーを伴う破壊とその恐怖の中から、鬼が変幻してくる成立要因を考えようとする<sup>(28)</sup>」ものとして評価し、自ら多くの事例を引いてこの説を発展させている。たとえば、三十三間堂の通矢の神事、熱田神宮の正月十五日の歩射、群馬県邑楽郡板倉町岩田の正月の弓取式など、弓矢を射て悪魔退散、五穀豊穡を祈願する神事が我が国には各地にある。なかには的の中心に鬼とか魔とか書いてある事例があり、しかも矢に葦や萱が用いられることがある。これらの事実はこ

れまで紹介してきたさまざまな民族のATU110と重なる。

この昔話は風を鎮めるために日本各地で行われてきた風祭とも無関係ではないだろう。北陸や中部地方では八朔の風祭に、竿の先に鎌を縛りつけたものを切妻や庭に立てて悪い風を防ぐ風切り鎌の風習がある。北陸には神木に鎌を打ちつけて風を鎮める、鎌打ち神事がある。日本の各地で風を鎮めて豊作を祈る祭りがおこなわれ、神社では大蛇退治やえびす神楽が奉納されてきた。北方民族の昔話に登場する鎌やナイフや大針と、日本の神事に用いられる鎌がまったく無縁のものとは思えない。大空に向かってすつくと立つ風切り鎌の姿は、ニヅフの昔話の中で活躍する主人公ニ錐の雄姿を連想させる。強風のときに風が鎮まるのを待つ風日待、風止め籠り、潮待ち、風待ちといった習俗も全国各地にあり、そういう日には人びとは籠って昔話や世間話を語りあつたことが知られている。

この説話に登場する動物や道具たちは自らの意思と知恵によつて敵と対決する。ボゴラスはチュクチャの習俗を観察し、「生業に使われる石の斧や槌は人間に変身し、再びまたもとの姿に戻つて自分の居場所に横たわる<sup>(29)</sup>」と述べているように、道具には表面上の生活とは別に、隠された生活があると考えられていた。仇討ちに加わる鎌やナイフ、すりこぎ、臼、杵などについてもそれと同じことが言えるだろう。

主人公はこれらの道具や動物たちの助けがあつてはじめて、魔神退治を成し遂げることができる。このふしぎな助っ人たち

が自らの意思で行動する類話はこの説話が担ってきた本来の役割をよく残している。道具たちをさんざんにいためつけた悪者が退治され、哀れな最期を遂げるマヤの神話からも、道具に魂が宿っているとする観念を読み取ることができる。

北東アジア、アメリカ大陸北西海岸、インドシナ半島など、日本を取り巻く一帯でこの昔話が悪天候を回復させるために語られてきた事実は、「雀の仇討ち」、「猿蟹合戦」、「桃太郎」など、魔物退治をテーマとする日本の昔話の隠された意味を探るうえで貴重な資料である。

シベリアにはこの話型以外にも、寒さが厳しい時に暖気を呼ぶために語られてきた昔話がある。ハカスの猟師は狩りに出かける前に寒気が厳しいと次のような昔話を語る。「ある老人に三人の娘がいた。凍えるような寒さのとき、老人は娘を一人ずつ順に寒気の主のところへ行かせた。上の娘二人は寒気の主が課した試験に耐えられず帰されるが、末娘はすべての試験に耐え、寒気の主と結ばれる。すると寒気がゆるみ、暖かくなる<sup>30)</sup>」。この昔話や、これと関連した俗信はケト、セリクープ、ネネツなど複数の民族に分布している。ケトでは暖かい陽気をもたらすウーセシという神にこの昔話を語り聞かせる。ある語り手はこの昔話を語ったあと、「昔話はこれでおしまい。神よ、わたしがこれを語ったことで、どうかわたしを罰しないでください」と神に許しを求めた。この昔話を語ることができるのは夏季に生まれた人でなければならないというタブーがあり、この語り

手は三月生まれだったからである<sup>31)</sup>。日本の「蛇婿」や「猿婿」では父親が田に水を入れてもらうかわりに娘を嫁にやる約束をするが、これらの昔話も古くは日照りのときに語られたものはなかったか。

近年の研究によれば、アムール河流域やサハリンに居住する民族には山の精霊(熊)と水の精霊(ナマズ、トド、シャチ、アザラシなど)が定期的に闘う話がある。ニウフの話<sup>32)</sup>を要約しよう。

猟師が山の中で道に迷って何日も歩きまわるうち、ひとりの人に出会い、賓客として招かれる夢を見た。夢の中で山の人(熊)はこう言った。「自分は仲間たちの長だが、もう長くない。山の精霊と海の精霊はとぎがくると闘う掟があるが、いつも勝つのは海の精霊なのだ」。猟師はこの話を聞き、山の人に加勢することにする。闘いの時がくると、山の人は熊の皮を着、猟師を自分の背に乗せて海岸に下りた。すると沖から海岸へ巨大なトドが泳いできて暴れた。熊は恐ろしさのあまり口もきけずにいた。これを見た猟師は、「あれはおれたちの獲物だ。おれたちはあいつの肉を食う。あんなものは怖くない」と言い、トドを槍で突き、その肉を焼いて熊に食べさせた。熊は最初は怖がっていたが、食べてみるとうまかった。熊は猟師を背に乗せて山に戻り、仲間たちにこの話を聞かせた。そして自分の妹を妻として猟師に与え、猟師が一生獲物に恵まれることを保証した。

アイヌにも山と海が闘う話がある。<sup>34)</sup>「昔、熊とトドがいつしよに暮らしていたが、あるとき両者は権力闘争をはじめた。トドがあるまじき行為をしたので、カムイたちがトドを海に落としてしまった。それ以来、トドはいつも山に向かかって吠えている。だから山で狩りをするとき、トドの名前を口にしてはならない」という。これらの話も周期的に荒れ狂う凶暴な海の主を鎮めるために語られた話だったと思われる。

## 注

- (1) 柳田國男「昔話覚書」(『定本六』)。関敬吾「猿蟹譚」(『著作集4』、三原幸久(関敬吾)著作集4『解説』。飯倉昭平)中国の猿蟹合戦」『民話』第二二二号、未来社、一九六〇年七月号。ロバート・アダムス「昔話と南九州に伝わった太平洋文化」『東アジアの古代文化』大和書房、一九七七年。
- (2) 小島環禮「昔話の類型の变成」『韓国・日本の説話研究』仁荷大学出版部、一九八七年。
- (3) 斧原孝守「チベット族の昔話と『桃太郎』の源流」『説話・伝承学』第一八号、二〇一〇年、一五九頁
- (4) 齋藤君子「ツングースの『猿蟹合戦』(下)」『なろうど』第二二二号、一九九一年、三七—四五頁
- (5) 久保寺逸彦編著『アイヌ叙事詩神謡・聖伝の研究』岩波書店、一九七七年、五五頁
- (6) G・A・オタイナ「ニブフ口承文芸」『サハリンの少数民族』横浜国立大学教育学部、一九九三年、二〇〇—二〇一頁
- (7) Shiraishi H., Lok G., Звуковые материалы для исследования Нивхского языка I. p. 20-24/Endangered languages of the Pacific Rim. 2002, A2-015
- (8) Березницкий С. В., Этнические компоненты верований и ритуалов амуро-сахалинского региона. Владивосток, 2003, Текст №27, стр. 120
- (9) Березницкий С. В., стр. 119
- (10) Шренк Д. И., Об инородцах Амурского края. СПб., 1903, стр. 39-40
- (11) Таксами Ч. М., Нивхи. Этническая культура нивхов-аборигенов Тихоокеанского Севера и Дальнего Востока. Новосибирск, 2007, стр. 115
- (12) Березницкий С. В., стр. 102
- (13) Сказки народов Севера. М.-Л., 1951, стр. 352
- (14) Аврорин В. А., Материалы по нанайскому языку и фольклору. Л., 1986, стр. 92
- (15) 齋藤君子「ロンドン村の怪異譚」千葉大学文学部、二〇〇八年、二六頁
- (16) Мазин А. И., Традиционные верования и обряды эвенков-орочононов (конец XIX -начало XX в.). Новосибирск, стр. 58

- (17) チャターエヴァ著、斎藤君子訳『シベリア民族玩具の謎』恒文社、一九九三年、一一四頁
- (18) チャターエヴァ、一一八一—一九九頁
- (19) Аврорин В. А., стр. 6
- (20) Сказки и мифы народов Чукотки и Камчатки. М., 1974, стр. 255-257 (斎藤君子編訳『シベリア民話集』岩波文庫、一九八八年、四二頁)
- (21) Богораз В. Г., Чукчи. Религия. М., 2011, стр. 19 (Eng. ed. 1912)
- (22) Bogoras W., *Chukchee mythology*. Leiden, 1910, p. 42 (斎藤君子編訳『シベリア民話集』三七頁)
- (23) A・レシーノス原訳、林屋永吉訳『マヤ神話ポル・ヴフ』第1部第3章、中公文庫、一九七七年、二二二頁
- (24) 小島環禮「昔話の類型の变成」『韓国・日本の説話研究』仁荷大学出版部、一九八七年、三五四—三六一頁
- (25) 小島環禮、三五九—三六〇頁
- (26) 斧原孝守「チベット族の昔話と『桃太郎』の源流—泰団子と三匹のお伴をめぐる—」『説話・伝承学』第一八号、二〇一〇年、一六一頁
- (27) 斧原孝守、一六〇頁。ゲン・カオ・ダム、チャン・ベト・フォン、谷本尚史、稲田浩二「編訳」『原語訳 ベトナムの昔話』同朋社、一九八〇年、三一—三三頁。
- (28) 近藤喜博『日本の鬼』講談社学術文庫、二〇一〇年、
- 二二頁
- (29) Богораз В. Г., Чукчи. Кн. 2. 1939, стр. 48
- (30) Буганаев В., Этническая культура хакасов. Абакан, 1998, стр. 266
- (31) Мифы, предания, сказки кетов. М., 2001, стр. 98-100
- (32) Христофорова О. Б., Медведь и сом: типология мотива. // Миф, символ, ритуал. Народы Сибири. М., 2008, стр. 199
- (33) Крейнович Е. А., Этнографические наблюдения у нивхов в 1927-1928 гг. // Страны и народы Востока. 1987, Вып. 25, стр. 117-121
- (34) Мелетинский Е. М., Неклюдов С. Ю., Новик Е. С., Историческая поэтика фольклора: от архаики к классике. М., 2010, стр. 132-133
- (オゴトノ・キミ)